

タカン・ブックス

この学校にいと 狂っちゃうよ

ナット・ヘントフ
片桐よう子訳



晶文社



著者について
ナット・ヘントフ

一九二五年マサチューセッツ州ボストンに生まれる。ノースイースタン大学、ハーヴァード大学、ソルボンヌ大学に学ぶ。ニューヨークに住み、雑誌《ブレイボーイ》のジャズ欄を担当。また黒人公民権運動・ベトナム反戦運動の行動的理論家としても知られ、最近では現代のゆがんだ教育に意欲的に取り組んでいる。「ジャズ・カントリー」はじめ「ベジヤンコ」にされてもへこたれないぞ!」「ぼくらの国なんだぜ」などの若い世代にむけた新しい文学の旗手として、多くの読者に親しまれている。

訳者について

片桐よう子（かたぎり・ようこ）

一九三二年東京生まれ。早稲田大学文学部卒業。現在、京都精華大学講師。

訳書「ぼくらの国なんだぜ」（晶文社）

ダウンタウン・ブックス

この学校がっこうにいと狂くるっちゃうよ

一九八一年五月二五日発行

著者 ナット・ヘントフ

訳者 片桐よう子

発行者 株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一〇二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・四五〇三（編集）

振替東京六一六二七九

あづま堂印刷・美行製本

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。
〈検印廃止〉 落丁・乱丁本はお取替えいたします。

この学校にいと 狂っちゃうよ

ナット・ヘントフ 片桐よう子訳

ダウンタウン・ブックス



晶文社

Nat Hentoff :

THIS SCHOOL IS DRIVING ME CRAZY

Original Copyright © 1976

by Nat Hentoff

Japanese Copyright © 1981

by Shobun-sha Publisher, Tokyo.

Japanese translation rights arranged

with Deborah Rogers Ltd.

through Japan UNI Agency, Inc.

この本の最初の読者――

ニコラス、トマス、ジェシカ、ミランダ
マラ、ライザ、そして特にマーゴットに。

かれらのおかげで、書きつづけることができた。

ブックデザイン

平野甲賀

I

「ベンジーの算数のクラスにねえ」サムはそう言いながらトーストに苺ジャムをぬり、もう一方の手でココアを取ろうとすると、袖にべっとりジャムがついてしまった。「トラファルガーの校長の子がいるの、だけど、その子のおやはその子をぼくたちの学校に入れたんだよ。自分の親が校長をしている学校にいるのは子どもにとって公平じゃないって言ってるんだって。子どももつらいし、おやじもつらいよね」

「ほら」サムの母親は、ナプキンを渡しながら言った。「袖についたジャムをふいたら、シャツのポケットにはいっちゃったペーコンをお出しなさい。まさかおやつにとつとくつもりじゃないでしょ」

「だから」とサムはしゃべりつづけた。ナプキンで袖をふくと、もつと広い範囲にジャムをぬりたくることになった。「どうしてぼくはパパの学校に行かなきゃならないの？」

「お父さまはね、安易な解決法がいいとは思っていらっしやらないの。それに、あなたも知ってるでしょ、お父さまはご自分の学校がこの市で一番いい学校だと信じていらっしやるの。だから、自分の息子をよその程度の低い学校に入れたいとは思いいらないのよ」

サムはシャツのポケットからベーコンをつまみ出して食べた。「子どもにとって特権がありすぎるのはよくないことだよ」彼はつぶやいた。

「なまいき言うもんじゃありませんよ」母親はほえみながら言った。「それにね、お父さまは、あなたをほかの生徒と全く同じに扱えるということが示せないようでは、オルコット学院長としてちょっとはずかしいと思ってるからっしやるのよ」

「そうかもしれないけど」サムはココアをひといきに飲んで言った。「時々ねえ、パパ、ぼくの名前おぼえててくれるかなって心配になっちゃう」

突然、サムは狂ったように、全部のポケットを調べはじめ、四つんばいになって、テーブルの下や自分の椅子の下を探し、急に立ち上ると、テーブルの上を精細にながめ、コインフレークのボールをつかむと、中からバスの定期券を取り出し、ぬれたままシャツのポケットへねじこんだ。「それにさあ」サムは言った。本やノートや、キャップがどこかへいつてしまった二本のペンをかばんに入れながら、「みんな学院長の悪口を言うでしょう、それが自分のおやじ

で、ママやパパから使っちゃいけないって言われてることばなんかみんな使うじゃない、変な氣しちゃうんだよ」

「あなた、お父さまをかばわないの？」母親はたばこに火をつけた。サムがそれにとびかかろうとしたので手を引っこめた。

「たばこやめるって言ったじゃない」サムは彼女の前に立ちはだかった。まるで今にも地面を蹴^けろうとしている小さい雄牛のように見えた。

「少しずつやめるところよ」母親はいらいらしたように言った。「それに、学校でけんかがやめられないような人や、——毎晩そばに誰かついていてガーガー言われないと宿題ができないような人、それも宿題の紙を学校において来なければだけど、学校で二週間に上着を二枚、二枚もよ、なくして来るような人——それから……」

「わかったよ」サムはたばこをにらみ、次に母親をにらみ、指でのどを切るしぐさをした。

「いま、茶色の靴とスニーカーを片方ずつはいているような人が、他人にお説教ができますか」母親はまだつづけた。「質問に答えてないわ。お父さまをかばってあげたの？」

サムはコーデュロイの上着を着て、右のポケットにバナナを一本押しこみながら言った。

「それがねえ、みんなの思うつぼなんだよ。もしぼくがそれをやると、みんなはもっと悪いこ

とばでパパのこと言うの」

「みんなはあなたがお父さまに言いつけると思わないの」母親は彼の足もとを見て、くびをかしげた。

「ママったら！ ぼくのことどんな子だと思ってるの？ みんなにはちゃんとかわかってるよ」

「お父さまが毎朝わたしたちより先に食事をなさるのと同じようなことね？」

「まあね」サムはうなずいた。「パパが言うでしょう」彼はつづけて、できるだけ低音で言った。「校長というものは最初に来て、最後に帰るものです」サムはおじぎをして見せた。「パパは自分が船長みたいに思ってる」

「まあ」と母親は言ったが、笑いそうになるのを抑えてくちびるをしっかりと合わせていた。

「失礼じゃないの。さ、そのスニーカーをおぬぎなさい」

「時間ない」サムはどなってドアへ突進した。「学院長先生がおっしゃるの、『遅刻する子は怠け者である、怠け者は落第だ』って」

「お父さまはそんなことおっしゃいません。戻っておいで！」サムの母親は立ちあがって、サムの背中に言った。「学校にスニーカーはいて行っちゃいけないでしょ！」

「時間ない、時間ない」サムが大きな声を出した。「どっちにしろ、片ちんばなんだよ」

「サム！」母親も大きな声を出した。「そのかぼちゃどうするの！」

サムはかばんを首にかけ、バスの定期を口にくわえ、自分の頭の二倍ほどもあるかぼちゃを片手にかかえ、もう一個をもう一方の手にかかえ、やっとこさドアをあけたところだった。ドアはあけっぱなしで、エレベーターのボタンを鼻で押し、エレベーターがこの階を通過して上へ行ってしまったのを見て、そろり、そろりと階段の方へ歩いた。通りに出てしまうと、注意深く歩いてバスの停留所へ行き、待った。だんだん背中が曲ってきて、カバンが地面につきそうだった。バスが来ると、ほっとしてため息を一つついた、そしてゆっくり、前にもまして注意深くステップをあがり、料金箱の上に顔をつき出した。

「料金」と運転手が言った。

「ティーキ」サムの顔は運転手の顔のすぐそばだった。

「こら」運転手は顔を引っこめて言った。「何だそりゃ。おれはおまえの親類でも何でもないんだぞ」

がっかりしてサムは口をあけて、足もとへ定期券を落とした。

「定期だよ」サムは心配そうに床の方をあごで示そうとした。がその時左手のかぼちゃが落ちそうになってバランスを保つのに精一杯だった。しかし、その動作で右の方の手がゆるんで、

かぼちゃは運転手のひざの上にのつかった。

「口に定期くわえてたの」サムは説明した。

運転手は、かたい表情でサムをにらむと、かぼちゃを持ち上げて、サムの右腕の下に押し込んだ。

「しっかり持ってるよ。お客から食べ物もらっちゃいけないことになってるんだよ」

サムは、ゆっくり、注意してしゃがんだ。両脇にかぼちゃをかかえて、もう少しで指に定期券がふれるところまでいったところでバスが動き出し、はずみでかぼちゃが一個落ちた。サムは通路をころがって行ったかぼちゃを追いかけようと立ち上がった拍子に、料金箱にひじをいやというほどぶっつけた。痛さにうめくと、もう一個のかぼちゃが先のを追いかけるように、通路を後の方へころがって行くのを見て、またうめいた。

「おまえ」と運転手が言った。「昨日ローラースケートはいて乗った子だろう？」

サムはかぼちゃに目を向けていた。そしてそれらは乗客たちの足の間にはさまっていた。「そうだよ。でももう二度とやらないよ。降りた時もう少しでバスの下敷になるところだった」

「もう！」運転手は叫んだ。バスは赤信号でとまった。「降りてくれ、降りてくれ。さ、そのかぼちゃを持って降りてくれ。酔っぱらいと、自分自身や他のお客をごたごたに巻きこむよう

な子どもは乗せないんだよ」

「ぼくを追い出すことはできないはずだよ」サムは抗議した。「ぼく定期持つてるもん」

「おれが乗っている奴、悪い奴をきめるんだよ」運転手は言った。彼の声はいらだたしく高くなった。「おれがバスに残ってもいい人間もきめるんだ。降りろ！」

大きい、赤ら顔の男がかぼちゃを二つともバスの前方へ持って来て、サムの両脇にかかえさせてくれた。そして運転手に言った。「本気で言ってるのかね？ この子は何もしちゃいないが」

サムも言った。「そうだよ。ぼく何もしてないよ。かぼちゃがバスに乗っちゃいけないってどこに書いてあるのさ」

「これですからね」運転手はサムの頭越しに大きい男に言った。「昨日この気ちがい小僧のおかげで、もうちょっとで足をひいてしまうところだったんだ。ひとつ身にしみておぼえてほしいんだ。次は、かぼちゃも持たず、ローラースケートもはかず、おれをカッコさせずにバスに乗るだろうよ」

「自分のことを考えてみるよ」。大男の顔はふくれたように見えた。「きみにこの子を追いつく権利があるのかね。きみの子だったらどう思うかね？」

「おれには子どもはいねえんでね、幸いなことに」。運転手はドアをあけた。サムはかぼちゃを胸に抱いてとびおりた。

「降りなくてもいいんだよ」赤ら顔の男がサムを追うように言った。

「いいんです」サムは大きい声で答えた。「このバスの番号覚えましたが、訴えてやります」

「おまえはもうこのバスには乗せてやらない——永久にな！」運転手は本気でどなっていた。

「それで大人なんですか」運転手のすぐ後の席の年かきの女が彼の耳もとにとがめるように話しかけた。

「誰にでも降りろと命令できるだけの正常な精神も持ち合わせてます」運転手が小さい声で言った。

バスが行ってしまい、サムは眉をしかめて、かぼちゃを地面におき、ポケットというポケットを乱暴にさがした。「しまった、定期拾わなかったんだ」

十五分後、サムと二つのかぼちゃは、後者は何回も歩道にぶつかったために思いなしが形が変わったようだったが、ブロンソン・オルコット学院に到着した。

入口で、背の低い、パリっとした紺の制服に身をかためた、まるっこい、四十代後半の黒人

の守衛が、腕時計を見た。

「今週二度目」彼は宣言した。

「バスから降ろされちゃったんだ」サムは言った。「料金はらったらさ、運転手にそんなことする権利はないですよね」

「何か悪いことをしなければね」と守衛はにこにこして言った。「さては……」

「やめてよ」サムが言ったとたん、手がゆるんでかぼちゃが地面にぶつかった。「かぼちゃに偏見もってるんだ、その運転手。かぼちゃがきらいなんだよ」サムはもっているかぼちゃをしっかりかかえると、そろりそろりしゃがんで落ちたのをかかえた。

「では、チャーリー・ブラウンのかぼちゃ大王に報告なさったらよろしい」守衛はハハハと笑いながら言った。

笑いごとじゃないよ、サムはひとりごとを言い、千鳥足でバランスを取って、守衛のところを通りぬけた。やっと彼は自分の教室へたどりつき、自分の額でできるだけ軽く、ドアをたたいた。先生は黒板からふりむいてサムを見て、ため息をつく、ドアをあけてくれた。

「よく来ましたね」サリバン先生は言った。「欠席につけてしまいましたよ」

サムは教室の後の方へ歩いて行った。ひとつひとつの机のひとりひとりが、目で彼を追った。